

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04853

研究課題名(和文)「ことばの教育」における教員養成の連携に向けて

研究課題名(英文) To collaborate on teacher training in "language education"

研究代表者

仲 潔 (Naka, Kiyoshi)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：00441618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国語教育・日本語教育・英語教育という3つの「ことばの教育」が連携的に取り組んでいくために、教員の養成にとって求められる知識・態度はどのようなものであるのか、という問いを探究するものである。機械翻訳技術が飛躍的に向上する一方で、グローバル社会や共生社会において求められるコミュニケーション能力を、機械翻訳がすべてまかなえるわけではない。それぞれの教科書を分析すると、異文化や異言語に対する見方が提示されていたことが明らかとなった。学習者が教科書の内容を鵜呑みにせず、未知の情報を多角的に判断できる力を育成するために、ことばの教師にとって不可欠な視点を考察している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ことばの教育の連携が提唱されてから久しい。グローバル化により様々な言語文化的価値観が錯綜とする昨今において、従来通りの「母語話者のための国語教育」「非母語話者のための日本語教育」「外国語としての英語教育」という枠組みでは、現実のグローバル社会におけるコミュニケーションに対応することが困難であるからだ。本研究では、「ことばの教育の連携」を具体的に進めていく上で、教員養成にとって求められる視点の一部を提供する点で、社会的意義がある。また、学術的には、認知言語学と社会言語学が同一の問題意識を持って考察を進めたことに意義があるだろう。

研究成果の概要(英文)：This study explores the question of what kind of knowledge and attitudes are required for teacher training in order for the three "language education" (kokugo, Japanese language and English language), associating in a common cause, to nurture learners to be active in the "global" society. Recently, though machine translation technologies have been improved dramatically, they do not cover every aspect of skills in our intercultural communication required in a global and coexisting society. Analyzing each language textbook revealed that they presented stereotypical viewpoints of or attitudes toward different cultures and languages. Our study shows an aspect of essential viewpoints and attitudes for language teachers in order to develop their ability to judge unknown information from multiple perspectives, rather than just accepting the textbook content.

研究分野：社会言語学、英語教育

キーワード：言語観 内容分析 異文化間教育 コミュニケーション 日英語対照分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 国語・英語・日本語教育の射程範囲

従来の英語教育・国語教育は、日本国内の日本人を学習の対象としてきた。他方で、日本語教育は日本語の非母語話者を対象としたものである。

英語教育においては、本研究の開始当初に、「国際共通語としての英語」という教育観に基づいた方針が提示された。また実社会においては、アメリカ合衆国における“Plain English”運動において「やさしい英語」の使用を促進する運動があった。これらの教育観・言語観は大学教育や社会全般を対象としたものであり、義務教育段階の英語教育に本格的に導入されてきたわけではない。国語教育においても、文学中心の教育観から脱却し、コミュニケーション能力の育成へと移行してはいるものの、学習対象を日本人とし、母語話者並みに日本語を習得させようとする教育観は根強く残っている。これらのことから、英語教育・国語教育のいずれにも、外国人児童生徒や多言語社会という社会的事実が反映されているわけではないと言える。

こうした状況に対し、日本語教育においては、「やさしい日本語」が体系的に示されつつあり、実社会での日本語使用だけでなく教育においても実践されつつある。このことは、日本語教育において母語話者の規範を絶対視してきた教育観を問い直すことを意味する(庵ほか、2013等)。ただし、日本語教育は日本の義務教育段階での必修科目ではなく、あくまでも日本に在住する日本語の非母語話者を対象としたままである。

(2) ことばの教育の連携

「ことばの教育」は、その連携の重要性を説く先駆的な研究はあるものの(例えば、2012年、日本語教育国際研究大会における口頭発表「ことばの教育の連携」佐藤慎司ほか)、義務教育段階への具体的な方策として体系的に提示されていない。例えば、「国語の知識を英語学習にどのように活かすか」のように、既存の教科目の枠組みは保たれたまま、互いの言語教育への示唆を示すにとどまっていた。そこには、日本語・国語・英語の教育に携わる研究者どうしが、教科の枠を超えて同一の課題に取り組むという視点が弱く、またそのような研究成果を義務教育段階で実践していくための教員養成への示唆も乏しかった。その意味で、ことばの教育を担う教員養成に対する貢献・還元が十分に議論されていない。

また、「グローバル社会」においては、従来までの「英語」や「日本語」のように、各々の言語が純粋で閉じた体系を成しているわけではない。この分野の最新の研究成果であるメトロリンガリズム(Pennycook & Otsuji, 2016)が示すように、多言語状況は雑種の・異種混交的なのである。グローバル社会における言語状況の現実を無視したままの言語教育観であっては、たとえことばの教育を「強化」しようとも、十分な対応ができないことが予想される。

以上から、ことばの教育の連携を視野に入れた教員養成が不可欠である。その際、「ことば」に対する言語教師の既存の言語観を問い直すことが含まれるべきであると考え。国語・英語・日本語の各々の言語教育が個別に研究・実践を重ねるのではなく、理論的にも実践的にもより具体的に連携をとって研究を蓄積し、ことばの教育を担う人材の育成を目指す必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、日本語・国語・英語という3つのことばの教育に携わる研究者が互いの枠組みを超え、課題を発見することにあつた。そして、その発見を「ことばの教育の連携」を実現していくための基礎とし、教員養成の課題を示すことにあつた。

主たる課題として想定していたのは、ことばの教育における規範を母語話者から脱却する際の長所・短所の把握と、そのような教育観を持った教員をいかにして養成しうるのかという点である。単に「ことばの教育を連携」というスローガンにとどまるのではなく、具体的な課題の発見および教員養成のための諸課題を整理することを目指した。その際、教材を多角的に分析することに加え、主な教授法の批判的検討を行うと同時に、それをいかにして学習者に提供すべきなのかについて考察することを目指した。これらにより、共生社会・グローバル社会に向けた英語教育・国語教育・日本語教育の抜本的改革に示唆を与えられると考えた。

研究開始当初、英語教育・国語教育・日本語教育の教育実践者への聞き取り調査を行なったが、後述するように、その中で言語の「正しさ」を重視する能力観が、ことばの教育の連携を進めていく上での問題であると考えられるようになった。そして、そのことが実社会におけるコミュニケーションで求められる能力との差を生んでおり、結果として教育実践や教員の教育的信念を生産/再生産していることを克服する必要があると考えた。そこで、当初の研究目的の1つである「やさしい日本語」と“Plain English”の関連性の解明よりも、教育現場における能力観に注目するようになった。「正しさ」を重視した能力観の背景には、ことばの教育に携わる教員たちの言語使用の実態に対する理解が十分ではないことがあげられ、このことを社会言語学的・認知言語学的に実証的に論じることを目的に据えた。もちろん、当初からの最終的な目的である「教員養成への還元」はそのままである。

なお、上記の「やさしい日本語」と“Plain English”の関連性については、その体系化については追求することができなかったが、部分的に日本語と英語の間にある、各々の言語学習者の認識のあり方の異同については研究を進めることができた。その際、母語話者を規範とした教育観からではなく、学習者の習得した言語表現の伝わりやすさを念頭に、彼らの母語が持つ言語文化的背景を考慮することにした。その目的は、先述した教育現場における能力観の差異を埋め、より包括的に「ことばの能力」を明確化することで、教員養成のあり方に示唆を与えることである。

3. 研究の方法

本研究の体制は、社会言語学者と認知言語学者の共同であることを生かし、同様の分析対象を異なる視点から考察し、総合的・包括的理解を目指した。

なお、国語・英語・日本語の教育実践に携わる教員への聞き取り調査を行い、学術上の「能力観」と教育現場のそれとの間に溝があることに気づいたため、新しいことばの教育観を教育現場に導入していく上で「能力観」の整理を重視した。具体的には、教育現場の教員の多くが、「コミュニケーション」において各々の参加者の個人的能力を重視しているのに対し、学術的な「能力観」では参加者同士の関係性における力に主眼を置いているということである。もちろん、学校教育である限り、各学習者の個人的能力を促進し、測定することを放棄することができないが、同時に関係性の中で生まれるコミュニケーションという現象を、個人的能力にのみ還元することは現実的ではない。また、このような教育現場における能力観が、伝統的な「正しい言語」という言語教育観と親和的であることが想定される。言そこで、研究開始当初から予定していた以下の2つの分析を、教員養成における「能力観」のあるべき姿という文脈に位置付けることを目指して研究を進めた。

(1) 教材の分析

教材を分析する上では、言語材料の分析については認知言語学的な考察を主たるものとした。また、教材のコンテンツについての分析においてはCDA(Critical Discourse Analysis、批判的言説分析)の手法を取り入れ、言語表現や教材の文脈に対する理解を包括的に進めた。より具体的には、言語材料が提示されているコンテンツをコミュニケーションの「場」と捉え、その場における対人関係・登場人物の発話内容や提示されている言語文化に対する見方に加え、言語材料がその「場」としての適切性を確保できているのかを考察した。結果として、文脈には不自然な言語使用が用いられている点が明らかとなったことに加え、コンテンツにおいては言語的・文化的な偏向したものの見方が提示されていることの一部を示した(伊藤2018、仲2018)。

(2) 言語使用の実態

留学生や日本人英語学習者の英語使用の実態を調査した。その際、母語と英語との表現上の関係性に着目すると同時に、彼らへの言語意識調査を加え、実態としての考察も加えた。具体的には、日本人を含む英語学習者を調査対象とし、彼らに「英語で書かせる」という課題を与えた。同様の課題を英語母語話者にも書いてもらい、双方を比較することにした。認知言語学的な説明では、母語話者を規範とした上で、日本人ら非英語母語話者の英語使用が説明されることが多いが、そのことに加え、彼らがどのような認識で各々の表現を生み出しているのかを調査した。それにより、従来の認知言語学での説明では不十分であり、彼らの中には意図的に母語の思考法を英語に投影するという戦略的に言語を使用していることを明らかにした(Itoほか、2019)。

4. 研究成果

既存の日本語・国語・英語の教科書の多くは、社会構造に対する無批判な姿勢を学習者に提示し、グローバル社会が抱える諸問題の解決には個々の学習者の努力に委ねられるという内容が見られた。また、日本語と英語の表現上の差異を、それぞれの言語学習者や非母語話者が必ずしも認識しているわけではなく、場合によっては意図的に使用していることも明らかとなった。教科書の内容そのものに対する批判的分析に加え、言語学習者や言語使用者のことばへの認識を垣間見ることができたことで、ことばの教育に携わる上での留意点を整理した。

また、教育現場における能力観を問い直す視点を整理し、「ことばの教育」の目的論(原論)に位置付けた。それにより、ことばの教育を担う教員養成において、上述した既存の価値観への批判的検討に加え、2者間以上の対話における関係性を評価し、それを教育実践につなげる視点を示すことができた。

最終的に、教員養成のあり方への示唆を目指した本研究であるが、教材の持つ諸問題の解明と教育現場における能力観の問題についてはある程度体系的に整理することができた。もちろん、これらについては未だ不十分であると考えているが、同時に、「ことばの教育」を担う教員たちの言語文化的多様性を考慮していないという問題も発見できたことは今後の研究課題として重要であると考えられる。したがって、今後は学習者の多様性に加え、教員の多様性についても言語文化的背景や言語の学習履歴、言語の運用能力や経験などを考慮し、より具体的に教員養成のあり方を再考する視点の提供を目指したい。

【言及文献】

Pennycook, Alastair & Emi Otsuji(2016) *Metololingualism*. Routledge.

庵功雄ほか(2013)『「やさしい日本語」は何を目指すか』ココ出版。

Ito Hajime, Iwao Takanori, Naka Kiyoshi. (2019) “The empathy hierarchy in a reference/target prominent language and a trajectory/ landmark prominent language” Japanese Studies Association of Australia Biennial Conference 2019年7月4日 MONASH University.

伊藤創,「日本語教育における「期待される学習者像」」『社会言語学』(18)85-96. 2018年.
仲潔,「中学校英語教科書における「社会的な話題」- 視点の画一化を覆い隠す題材の多様化」『社会言語学』18.65-84. 2018年.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 仲潔	4. 巻 18
2. 論文標題 中学校英語教科書における『社会的な話題』：視点の画一化を覆い隠す題材の多様化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語学	6. 最初と最後の頁 65,84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲潔・戸村綾乃	4. 巻 26
2. 論文標題 主体的・対話的な力を育む小学校英語科授業：“World Traveler活動”を通じた異文化への気づき	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新学習指導要領が目指す学びに向けて：各教科等における主体的・対話的で深い学びの実現のための授業実践	6. 最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤創	4. 巻 154
2. 論文標題 日本語における事態の捉え方・描き方の「型」の解明とその習得に関する研究 英語・インドネシア語・ベトナム語・タイ語との比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 153-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤創	4. 巻 18
2. 論文標題 日本語教育における『期待される学習者像』－ 「多様なものの見方」を提供するリソース としての外国人日本語学習者とテキスト－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語学	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲潔	4. 巻 66巻1号
2. 論文標題 英語科教育における評価活動の再考	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)	6. 最初と最後の頁 135-144
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 仲潔・岩尾考哲	4. 巻 17号
2. 論文標題 中学校「国語」・「英語」教科書における「異文化間交流」像	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会言語学	6. 最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩男考哲・宮地弘一郎	4. 巻 1
2. 論文標題 日本の「国語」の教科書で提示される語彙に関する調査	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中國文化大學日本語文學系國際學術研討會 日本に 関する教育と研究：文学・言語の多様性と多元化及び情報の 分析と異文化接触 論文集	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 1件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Ito Hajime
2. 発表標題 Creating a Multilingual and Multicultural Learning Environment: A Case Study of a Japanese Culture Course at the College Level in Japan
3. 学会等名 International Conference on Language and Literacy Education(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ito Hajime
2. 発表標題 Iconicity and alternation in direct speech in English
3. 学会等名 Construction semantics 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 仲潔・岩男考哲・伊藤創
2. 発表標題 日本語母語話者に期待されるコミュニケーション観：英語・国語・日本語教育の教科書分析を通して
3. 学会等名 韓国日語教育学会 2018年度冬季国際学術大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 仲潔
2. 発表標題 英語科教育の反グローバル性を問う
3. 学会等名 広島大学・言語と情報研究プロジェクト 第71回公開セミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩男考哲・宮地弘一郎
2. 発表標題 肢体不自由児の動詞の使用について
3. 学会等名 2018中國文化大學日本語文學系國際學術研討會 持続可能な社会のための日本語教育と日本文化研究を 模索して (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naka Kiyoshi and Higuchi Ken'ich
2. 発表標題 Japanese University Students' Perceptions of English and the Relationship Between Language and Society
3. 学会等名 The Japanese Studies Association of Australia (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hajime Ito
2. 発表標題 Comparison of Perspectives between English and Asian languages; Japanese, Chinese, Indonesian, Thai and Vietnamese
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Jonathan Angaray Aliponga, Yasuko Koshiyama, Hajime Ito
2. 発表標題 A hybrid language textbook for multicultural classrooms
3. 学会等名 Multidisciplinary Approaches in Language Policy and Planning Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩男 考哲 (Iwao Takanori) (30578274)	神戸市外国語大学・外国語学部・准教授 (24501)	

